

■あるこう あるこう
■考えすぎるとはどう
いうこと？■最近の若
者は…では終わらない
■名作で哲学■カケオ
くん四コママンガ

あるこう
あるこう
わたしはげんき

今年はGWが自分の定休と被ったため憂鬱（とにかく混むのが嫌なのだ）であつたが、あまりの好天に愛車でも動かしてみようか、という気になつた（無蓋車なもので…）。でも高速や国道は絶対に避けたい。奥さんは森々したところを歩きたいと言う。そこで向かつたのが、立山グリーンパーク吉峰。熊野川沿いを軽快に走つて、上滝で常願寺川を渡ればあつという間。訪れるのは二〇年ぶり。温泉施設はきれいに、キャンプサイトもよく整備されていると思つたら「モンベル立山ベースキャンプ」の看板が。ヴィジターセンターではモンタベアがお出迎えだ。ウェアやグッズも充実。知らなかつた…。



賑わっているエリアを後に、林道で展望台を目指す。この散歩が稀に見る心地よさで（気温、風、伐りたての木や草花の匂い、新緑に彩られ

た森、鳥のさえずり、土や草や落ち葉を踏みしめる感触）、「五感が研ぎ澄まされる」とは正にこのこと。自宅から半径5キロ圏内は限なく歩き回っているのだが、森を歩くのは格別なことだと再認識。ちょうどソロ関連の本『歩く人ソロ』と『ウォールデン』を読んでいたことも影響したかもしれない。

『歩く』と心が軽くなるのはなぜか
散歩の心理学』という今の気分につ
つたりの本が出た。散歩の効能につ
いて今まで漠然と感じていたこと
が、臨床心理士である著者と相談者・
患者との対話の実例から、心の回復
の場面において歩くという行為がど
のように絡んでくるのかが丁寧に説
明される。特に面白いと感じたのは、
皆さんも散歩をされる時はなんと
なくボーッとすると思うが、これが大
事で、その実「内面ではいろいろな脳
の領域が活性化している状態」(デフ
オルト・モード・ネットワーク)にな
っており、「その揺らぎの時間が、創
造性と関連する」という点。「現代は、
主体的に意識して、何かをする
(doing) に価値をおきがち」で「な



歩行が創造に結びつく例は枚挙に暇がないが、歩くことがもたらした思考・文化・歴史の総体を描き出すようにする大著レベッカ・ソルニツト『ウォークス 歩くことの精神史』と、ランボー、ルソー、ネルヴァル、ニーチェ、ソロー、ガンディ、キエルケゴール、カント、ヘルダーリンらの創造／想像力と歩行の関係を丹念に辿るとともに、読者を「外」へと誘う抗いがたい力を有するフレデリック・グロ『歩くという哲学』の二冊をここではお薦めしておく。

当たつて砕けろ精神で

読み終わったなら、何はともあれ、歩き出そう。

④

何に夢中になっていたのだろうと振り返ると、アニメ・漫画・音楽といったサブカル文化に支えられていた記憶が蘇った。さらに追い打ちをかけるように、中学生時代に我が家をやつてきたWindows 2000とインターネットによってサブカル沼に沈んでいくことに……。

今回紹介する『サブカル×学びという
さんによるサブカル×学びという
テーマで書かれたエッセイ集だ。本
人が「とにかくふざけているエッセ
イ集であり、世界一ライトな批評で
あり（略）ただの思ひ出話」と述べ
ている通り、今までの人生で触れて
きたコンテンツの数々を軽快な文
章で紹介しつつ、それによって得た
知見と人生哲学が語られている。ユ
ーモアあふれるエピソードの合間
に、鋭く差し込まれる本質的な言葉
に何度もハッとさせられた。

TikTokとバンク・ロックスを引き合
いに書かれた「自分にもできそう！
のアンテナを大切に」の章では、何
かを表現する事に対し臆さず挑戦
すべきであると説いている。スマホ
一つで表現者になれる現代は、一億
総クリエイター時代でもある。私た
ちはコンテンツを消費（インプッ
ト）するだけでなく、各々が軽やか
に表現（アウトプット）できるよう
になった。

「決して上手じゃなくてもいい、洗練されていなくてもダサくても、

カケオくん 特別版

作詞家の橋本淳が5月に死去された。淳さん程の大物となると巨星降つたとえるべきかもしれないが、

いい意味での軽みを感じさせる作風には似合わない気がする。淳さんの詞で一番多い言葉は「色」だろうか。

デビュー作の「青い瞳」、盟友岡美京平との初共作「黄色いレモン」、タイトルに色が入るヒット作も数多い。

やはり特別なのは「青」か。カケオくんの最も好きな色は「青」だ。この店は強烈。売っている本すべてに、ある書き込みがされている。ひとりではない。一冊一冊別人の所業。この古書店は一体？

ゆるやかなストーリーが存在すると思いきや読みすすめると破滅させられる。ホラーのたのしさが、完璧と呼んで羨ましくない曲を聴いて追悼たい。

考えすぎるとは
ぶらぶらして

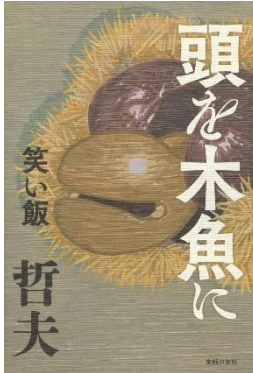
ショートコントを何本も続けて見るように、主人公の男に理不尽



まずやってみることに意味がある。著者のこの言葉を心に刻みながら、今後の生活や人生を楽しく過ごす指針にしたいと思う。

な出来事が次々と訪れます。「自分にもあるよね、ちよつと失敗しちゃったエピソードとか！」などと笑いながら読み進めて気づかされました。主人公と同じ出来事があるということ、自分もこの主人公のように不運なのか。

仏教に精通する著者だからこそ表現と世界観で結末にむけ解放してくれる流れは、お坊さんのありがたなお話をきいたあとと同じくらい腑に落ちるものがありました。読み終えてからの生活は、ちよつと生きやすくなったような気がします。



罹ったら 終わり

「プラダを着た悪魔2」を観た。デニールはいつ登場するかと考えていたら、あれは「マイ・インターン」のアン・ハサウェイだと思いついた。読書中もままある。十冊くらいを同時並行にて読むので、登場人物が行方不明になることがある。十冊すべて長編だと厄介、数冊はアンソロジーを入れてある。アンソロジーの利点は一話完結なので、どこから読んでも大丈夫ということだ。ホラーアンソロジー『呪いの凶凶』は書き下ろしの六編が収録される。その舞台は地方都市・交換日記・古書店・模倣作品・丑の刻参り・社員研修。地方都市を舞台にした「呪いは明るく輝いて」では、われわれの生活に必ず必要なものが呪いを拡散する。荒唐無稽な設定ながら、その手があつたかと思つてしまった。現代社会においてどこに住んでいても、これから逃れる術はほぼないからだ。古書店が舞台の「ほらあな」。この店は強烈。売っている本すべてに、ある書き込みがされている。ひとりではない。一冊一冊別人の所業。この古書店は一体？

本当の逞しさ



春が過ぎると雑草の季節である。庭の草は抜いても抜いても生えてくる……。どうしてそこから生えてくるんだよ……。雑草は、過酷な環境でも花を咲かせるし、何度踏まれても立ち上がるし、粘り強く耐え続ける、逞しいイメージだ。

ことのみに注力する、それが雑草の生存戦略だ。うむ、これは庭の雑草と戦つてはいけけないのではないだろうか・・・。

今自分のいる状況でムダに頑張ろうとするから上手くないか、これは往々にしてある。しなやかで合理的な雑草戦略、人生の処方方として見習うことも必要かもしれない。



⑧

「最近の若者は…」

では終わらない

例えば動画を倍速でみる、出社のための移動時間を短縮できる在宅勤務を希望する、AIによる要約を利用する——ここ数年、「タイパがいいから」と語られるのをよく耳にするようになった。ジェネレーショングヤップだなあと感じつつも、「なぜここまで効率のよさを求めるようになったのだろう？」と興味をもち、手に取ってみたのが『無敵化する若者たち』。

本書では、効率よく正解を求める若者の性質について、「正しいことを教えてくれる大人だらけの世界」で育ってきた背景や、親世代が成長してきた経済的背景などから分かりやすく分析している。単に「最近の若者はこうだ」と切り捨てるのではなく、「では、こうした価値観をもつ若者たちとどう付き合うべきか」という視点を先輩世代へ投げかける。こういった「最近の若者は…」という話題は価値観矯正に向かうかと思いがちだが、本書は現実的に切り分ける。変えるべきは行動と接し方で、若者の気持ちにフォーカスし変えさせようなんてエネルギーの無駄、とバツサリと述べているところにも魅力がある。

世代論として読むだけでなく、「異なる価値観の相手とどう共存するか」を考える本としても面白く、どの世代にも一読の価値がある一冊。



⑨

ことばを改めて考える

人間がことばを使う目的は何か？という定番の質問に対し、よく

ある答えの、「情報伝達の為」というのは誤解であり、「人間関係の構築、仲間づくり」が目的であるとのこと。『悪いことばの力』は、この重要な本質を教えてくれます。

当たり前ですが、人が生きる為に必要なことが人間関係の構築、仲間づくりです。その為に重要なものが、普段あまりに身近であり過ぎて気にも留めない「ことば」です。その機能、役割、価値を改めて考えてみると人間の本質が見えてきて、とても驚かされます。

人は一人では生きていけないわけで、自分が、集団の中でどのようなランクづけであるかが大変重要です。そのランクの操作の為に、我慢、悪口、自虐、褒め、の四つで形作られる〈四角形〉を日々駆使しているわけです。相手に対してのことばの使い方や強弱の度合いを間違えると自分の意図しない伝わり方をするので、気を付けないといけないということです。我慢も自虐もほどこにすべきで、悪口は結局自分の評価を下げ、褒めは、時に相手の立場を悪くするので使い方が難しいです。これらを駆使するテクニク本は、悪用厳禁本を含めてたくさん出ていますね。

また、本書でなるほどと思わせられたことは、ことばは「インフラ」であるという考え方。誰かの所有物でもなく、皆で使用する共有のものであるということ。SNSでの他者に

対する言葉遣いのルール、罰則がなければ必要なか、など、我々が直面している重大なことの前提になる考え方だと思います。

⑩



詩で学ぶ

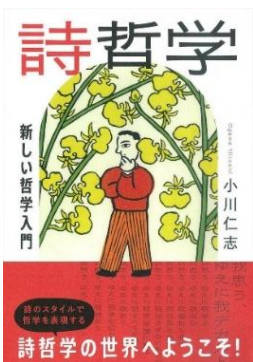
新ジャンル哲学

詩のスタイルで哲学を表現してみようという『詩哲学』はまさにタイトル通りの本であった。哲学史上重要な哲学者達が取り上げられるが、それぞれ見開き二ページの詩だけで紹介するという意欲的な試みだ。人物もしくはその哲学を紹介する詩とその哲学者の主要テーマを取り上げて、著者の思うままに詩で表現している。ソクラテスを紹介する詩は石ころに見立てて表現しており、「（無知の知）」と絡めて、「当たり前前のことを問う男、何の変哲もない石ころ」と表現しているとこ

面白く感じた。

私自身、哲学はそこまで詳しくないということもあり、詩がかなり独創的な物ばかりに感じられた。ちょっとしたコラムや解説はあるものの、本書の九割程が詩で構成されている。気に入る詩もあれば、全く理解できない詩もあり、人によって感じ方が違うだろうところが本書の見どころだろう。著者は新しい思考の表現形式の実験と語っており、まさにその通りだと同意した。著者の言う言葉の面白さが感じられる一冊だった。

⑪



擬人化溢れる国

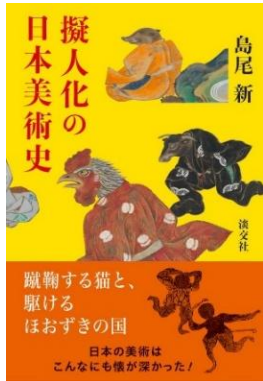
現代の日本では、擬人化されたキャラクターがほんとうにたくさん溢れています。全国各地のゆるキャラ、マスコットから漫画・ゲームの登場人物まで、擬人化されていないものは無いのではと思えるほどです。

もちろん擬人化が近年急に広まったわけではなく、本書『擬人化の日本史』では、古代から明治時代まで、様々な絵画や立体物が図版と共に紹介されています。

最も有名なものの一つであろう「鳥獣戯画」のカエルやウサギの仕草や表情は、今の目で見てかわいらしくて見事な完成度です。これが八百年以上前に描かれたというのだから驚きです。

また、私は初めて知ったのですが、「心学早染草」に描かれた善と悪の擬人化たちの姿も印象的でした。丸い頭にそれぞれ善・悪と一文字だけ書かれた直球すぎる見た目ですが、ここから現在も使われている「善玉」・「悪玉」という言葉が生まれたということで、意外にも重要なキャラクターでした。これほど多彩な擬人化が生み出されてきた背景には、日本人の精

神的・文化的な事情も関わっているのです。「付喪神」に見られるモノにも魂が宿るという人間だけを特別視しない考え方や、「神仏習合」に見られるイメージを自由に重ね合わせていく感覚は、重要な意味を持っていたのではないかと思います。これからも多くの擬人化キャラクターがつけられていくでしょう。過去の様々な表現を振り返り、まだ見ぬ未来のキャラクターを楽しみに待ちたいと思います。



⑤

ずっとひねくれてたら、よかったかな。



問題「以下の文章を読んで、太郎はどう思いましたか。次の中から選びなさい」
私が小学生だった遙か昔、このような問題がありました。子供の頃から多少ひねくれていた私は「太郎の気持ちは太郎にしかわからない」と思いつつも、正解？に○をつけていました。でも、文章を読んだの感じかたや考え方は人それぞれ。どこか納得がいかない思いがありました。

指南書とします。

⑥

『病氣と折り合う芸がある』は養老先生のがん再発後の治療経過を、主治医の一人中川先生との共著、対談集として出版されたものです。

中川恵一

病氣と折り合う芸がある

養老先生孟司

養老先生から生きることを教わります！

著者：養老先生 失部太郎

※価格は全て本体価格です。

中川先生のパートは養老先生の経過と再発時も含めたがん治療の選択肢などが語られます。この内容はもしもの時にためになります。養老先生は吐き気止めを抜いた抗がん剤の点滴でどうなるのか試したりちよつと変わった患者でありつつ、変わらず淡々とご自分の考えを語ります。

タイトルの「折り合う」とは辞書で調べると対立しているものという意味です。この場合、病気があっても完治しなくても本人が自身で妥協点を見出し自分らしく生きる事を模索することとなるのでしょうか。〈芸〉は技術のことのようです。「がんは死ぬまでの時間が与えられている。〇〇は死んでいるが〇〇は生きている。だんだん死んでいくがまだ生きている。死もがんも、自分の一部なのだ。いつか死ぬことを忘れず、今日の花を摘むように、今日を十分生きていることが大事。」などと達観した考えを展開します。

どう死ぬか、いつ死ぬか、重要なテーマですが私自身にとって日常生活でいつも考えることではありません。養老先生のように淡々とはいきませんが本書を読んだことを機会に生、死、人生にどう折り合いをつけるか思索したいと思います。

⑦